【旅行記】

台湾旅行顛末記

松島周一

二〇〇九年の三月一五日から一七日まで、史学専修の教員一同が参加する二泊三日の台湾旅行が行なわれた。以下、簡単なその報告を述べたい。教員らに関わる記述であるが、煩雑を避けるため、文中に敬語は用いず、できるだけ機能的な報告となるよう努めたい。なお、写真はすべて西宮秀紀氏の撮影したものを提供していただいた。

発端は、目黒克彦先生が二〇〇八年度を以て愛知教育大学の定年退職を迎えたことである。そうした際の専修（かつての教室）の恒例行事となっている教員一同での旅行が企画され、目黒先生の希望によって旅行先は台湾に決したのである。年度末の多忙な時期ではあったが、各教員が予定を調整しつつ、何とか必要な日程が確保された。結局、参加したのは目黒先生をはじめとして、西宮・見崎・黒川・野地・土屋・松島の教員たちと、愛教大歴史学会副会長の山田先生の八名。さらに、愛教大の大学院で日本語教育を学んでいる蔡さんが、台湾の高雄市の出身という御縁から、ガイド兼通訳として全日程に付き合って下さった。旅行のためのさまざまな事務的手続きは、海外への出張が多く、そのための対応にも慣れている土屋先生が進めてくれたおかげで、他の教員は特に頭を悩ますこともなく、無事に旅立つことができた。

それぞれに多忙でなかなか同一の行動をとることもない史学専修の教員一同が、折角うち揃って海外に出かける機会である。ただの物見遊山では勿体ないというのが、全員の偽らざる気持ちであった。目黒先生への感謝をこめた慰安旅行としての側面を否定する訳ではないが、合わせて各人の知見を広げ、歴史認識を深めるような研修の機会としてこの旅行を生かしたいという方向で、話は自ずとまとまって行った。台湾という旅行先は、そうした目的のために格好の地であると思われた。日本にとって、地理的に近いばかりでなく、近代史における縁も深い国（地域？）で

ある。短期間で限られた場所しか回れないにせよ、その地の歴史や民俗を対象とした調査、史料探訪ならば、史学の教員が揃って出掛けて行き、時間と体力を費やす価値も十分に存するであろう。それが出発前の教員たちの思いであり、基本的な日程を作成した土屋先生も、そうした意図を生かすための工夫を凝らしてくれたと思う。まずはそんな旅行の本筋を述べることに主眼を置き、弥次喜多道中的な顛末はなるべく控えておくことにしたい。

一日目は朝から中部国際空港（セントレアなんて馬鹿げた呼称は使いたくない）に集合。飛行機で二時間あまり。やはり近い。名古屋駅から新幹線で東京へ移動し、そこから在来線に乗り換えて目的地に向かうという、教員たちが日頃よく経験している出張の際の感覚である。

台北郊外の空港に下り立った時、日本との時差は一時間。三月中旬であったが、われわれの皮膚感覚としては日本の五月頃の陽気という気がした。僕個人は、ずいぶん以前であるが、沖縄に行った時のことを思い出していた。東京や名古屋などいわゆる内地にいる時とは別種の空気の中に立っているという、やや昂揚したあの感覚。少し強いかなと思える日差しの下で、からりと肌に心地よい空気が静かに揺れている。それはわれわれの体の奥底に眠っているエネルギーを少しずつ掻き立てるように、四肢にまとわりついてくる。決して不快な感じではなく。海外へ出向いた経験の乏しい僕が言うことであるから、あまり信用して下さらなくて結構であるが、われわれ日本人がはじめての、もしくはそれに近い状態での海外旅行に出向く時には、台湾のこうした空気はずいぶん適しているように思える。空港から自動車で一時間弱のドライブ。午後の早いうちに台北市内のホテルに荷物を置いて、直ぐに見学先へと向かう。そんな行動をとっても疲れを感じない。

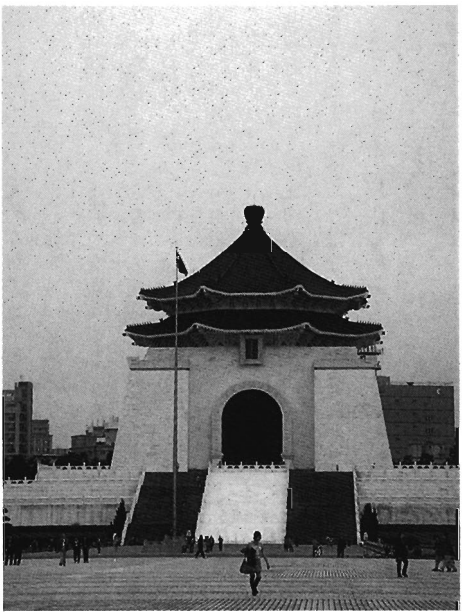
国立台湾博物館前にて

まず訪れたのは、国立台湾博物館である。この名前に僕が期待を抱いたとしても責められることはないであろう。

きっと、台湾の歴史や文化についての重厚な展示に接して、さまざまな知見を得ることができる、と夢想したとしても当然ではないか。何せ、その名前から連想されるわが日本各地の国立博物館は、そうした期待に十分応えてくれる展示内容を誇っているのだから。そして、短い時間のうちにざっと館内を一回りした僕は、見事にその期待を裏切られることになった。これは決してナショナリスティックな感情で口走っているのではないと自分では思うのだが、日本の博物館を見慣れた眼からは、この「国立」にしてしかも「台湾」を名乗る博物館の展示内容は、どうしても薄っぺらにしか感じられない。

これを現在の博物館側の責任といっては流石に気の毒であろう。日本での展示内容と差を作っているのは、背景となっている歴史そのものである。皇紀二千六百年なんて法螺を吹く気はまったくないが、千数百年の歴史と、それ以前の原始とよばれる靄のかかった曙のような時代の営みを背負ってきた日本列島には、われわれが心惹かれる多くの展示となるような物質と精神の蓄積がある。そんな日本と比較すれば、やはり台湾にはまだ、語るべき形となっている歴史が、十分には根付いていないのではなかろうか。この博物館で僕が興味を惹かれたのは、さまざまな「原住民」の民俗文化の紹介展示であった。そこには日付が存在しない。文字記録などに基づいた古代、中世、近代といった展開に関心を抱く者にとっては、必ずしも期待が満たされない部分も残ってしまうのである。

しかし、台湾の現実の歴史（の浅さ）とは別に、おそらく理念の上ではこの国だか地域だかの統治者、ただし主としてかつて大陸に覇を唱えた国民党政権が有しているのであろう中華帝国の後継者としての自負を濃密に窺うことができるように思われた場所もある。話の都合上、日程については前後する形の記述になってしまうが、二日目の午後に訪れた中正紀念堂つまり蔣介石元総統の記念館がそれで



中正紀念堂

ある。中の展示も当然ながら大陸政権であった時代の国民党の雄姿と、台湾に移動してきたのちの自由主義陣営（蔣介石の統治下の台湾がこう呼ばれる陣営に属していたこと自体、ひとつのブラックジョークであり、アジアの戦後史が帯びていた、あるいは帯びることを余儀なくされたアホらしさを象徴する事柄であるのかもしれないが）の一員としての国際的地位を強調する意図がみてとれるものであったが、ここでは何よりその建築物の外観について語りたい。僕はそれを目の当たりにした時、「天壇じゃないか」と口走ったものである。

誠に恥ずかしい限りであるが、この感想は正確ではなかった。僕がその時に連想していた建造物は、北京の祈年殿である。明帝国以来の首都となっていた北京の外城にある天壇とは、白大理石で三重に築き上げられた、天子が天を祀る土壇である。正確にいえば建築物となるのかどうか。その脇に聳えている建物が祈年殿で、やはり天子が豊作を祈願したところである。円形のどっしりした塔のような外観であるが、中正紀念堂は勿論そっくりではないにしても、それとよく似たイメージをふり撒きながら四囲を睥睨している。僕の幼稚な記憶違いはともかくとして、天壇にせよ祈年殿にせよ、天命をうけて地上の統治にあたる中華の皇帝が天を祀っていた儀式の場に相通じるイメージの建築物の中に、大陸から逃れてきたかつての中華の統治者が記念されて（祀られて）いるというのは、僕にとって、少し頭の痛くなるような現実であった。ここから、蔣介石の中華民国こそが（その打倒したところの）満州民族による清王朝も含めた世界帝国の伝統に位置づけられる後継の存在であると、いわば満漢ゴッチャの、辛亥革命からの歴史を考えればある意味ハチャメチャな帝王の系譜が、開き直ってアピールされていると僕が見てとったとしても、あまり責められることはないと思うのだが。

歴史と現実の皮肉な絡み合いに少し悪酔いしたような気分になっている僕は、一行の中では最「若手」（当然、蔡さんは除く）に属するにもかかわらずこの時には少しへバってしまったものである。そういえば、旅慣れていない所為か、僕は毎日、途中からはへバってばかりいたように思う。ここで話をまた一日目に戻すと、国立博物館の見学を終える頃には、多少の欲求不満も作用してか、やはり僕はへタバリかかっていた。ところがそんな情ない「若手」のオッサンとは対照的に、年配の先生方は本当にお元気でしたね。そのまま地下鉄に揺られて台北北方の淡水を訪れる強行軍を、みなさん平然とこなしていたものである。

そこは台北を流れる淡水河が北に向かい、やがて東シナ海へと注いでいく河口部に当たる。夕陽の美しさで知られ

る景勝地ということであったが、まずは明るいうちにと、その地にある古城跡を見学した。古城といっても、漢民族の城ではない。それとはまったく趣を異にする、西洋式の城、というよりまったくの洋館である。そのため、案内のパンフレットなどを手に取ると、「淡水紅毛城」と記されている。南蛮城なんて言わないだけ、気を遣っているかしらん（まったくの余談ですが、日本史の「南蛮文化」といった用語、あれは冷静に考えてみると、ずいぶん失敬な言葉遣いですよね。それを当たり前と思ってきたところにも、日本人の「国際感覚」の実態が見え隠れしているということになってしまうのでしょうか）。十七世紀はじめ、オランダとアジア貿易で覇を競ったスペインがまずこの地を征服、河口を見下ろす丘陵部に城を築いたところから、この地に日付のある「歴史」がはじまったようである。十七世紀の半ば近くなると、オランダが台湾北部に進攻し、ここ淡水のスペインの城跡に、新たな砲台や城を築いたという。そののち、オランダから台湾を奪取したのが、近松の『国姓爺合戦』で日本人にも馴染みの深い鄭成功であった。周知のように彼は明の遺臣であり、清朝に抵抗して、台湾に拠点をもとめたのである（二十世紀の蔣介石からみれば大先達にあたる訳か）。淡水の城もその支配の下に置かれた。しかし、鄭氏の台湾統治はまもなく終わり、清朝の版図がこの地にも拡がることになる。ただ、清朝にとって台湾は必ずしも重視すべき地ではなかったようで、淡水が再び歴史の脚光を浴びるのは十九世紀後半、イギリスとの貿易のために開港され、さらにイギリスの領事館が置かれた時期である。イギリスが領事館を撤収したのは一九七二年、台湾がこの地と洋館を接収したのは実に一九八〇年であったとか。

わざわざこんな歴史のおさらいをしたのは、さきほど国立博物館で感じたことを、この地でも再認識したからである。われわれ日本人が通常「歴史」の概念で捉えている対象は、ここ台湾では、われわれにとっての江戸時代からはじまっている。それ以前は民族学もしくは民俗学の世界に属することになろう。そこには明らかな境界が存する。あたかもそれは手を伸ばせばすぐに届くようでいて、しかし越えられない壁の向こうにもどかしく霞んでいる、歴史と歴史以前とを隔てる境界のようなもの。われわれにとっては、原始から歴史の曙へと移ろう千数百年前の日本列島を見ようとする時にまとわりついてくるあの感覚が、台湾では、もっとずっと近いところに息づいているのである。

ひとつ付言すると、流石に景勝地と誇るだけあって、淡水での夕景の美しさは嘆賞に価する。高台の城跡から、次第に煌めきを失って黒く染まっていく水面を見下ろしつつ

淡水の夕景

坂道を下る散策は、だらしなくヘタバリかかっていた僕の身心をリラックスさせてくれるようであった。多くの老若男女がその景色を愛でながら、街路を埋めていた。

二日目の午前は故宮博物館に出かける。その展示内容の充実ぶりを理解しようとされるならば、実際に見に行っていただくしかないであろう。僕が乏しい語彙を操ってどれだけ悪戦苦闘したって、あの魅力を語ることは難しい。そもそも……といったって、僕自身ろくに知っている訳ではないのだが、故宮とは、中華民国下の一九二五年にこの博物館が創設された場所である紫禁城を指すという。中華数千年の文物から選りすぐられた逸品が、清帝国に至る歴代皇帝の勢威によって集められ、それらがこの博物館に収蔵展示されたのであるから、充実の極致といってもいい偉容を誇っているのも頷ける。ただし、紫禁城とは明・清の中華皇帝の拠点であるから、当然ながら北京の地に存する。ここ台北ではない。そして周知のように、北京にもちゃんと故宮博物館は存在している。この珍妙な現実が、僅か（といっていいのかな、歴史的には）六十年前の現実である国共内戦の結果として生じている、ということを、館内に群れ合っている多くの日本人観光客（パンフレットも案内用イヤホンも、ちゃんと日本語版が、しかも大量に準備されている）の方々はどれくらい認識しているのであろう。僕の前を通り過ぎていった、明らかに日本語でいちゃついていたカップルが、「すごいね、故宮博物館って北京にも台北にもあるんだ」「へえ、でっかい支店なんだな。流石に商売熱心だなあ」なんて話していなかったものか、多少気に掛かる。もっともこの感想には、なかなか美形であったカップルに対するヤッカミも相当程度入っていることは認めざるを得ないのであるが。

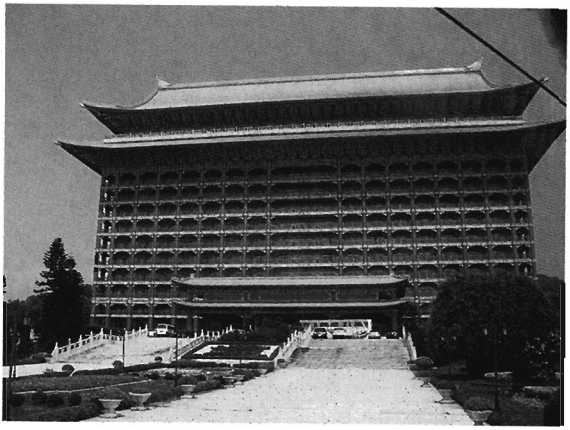
しかし、それ以上に僕が気に掛かったのは、相当数にのぼっているらしい大陸からの観光客である。中国共産党にとって台湾は自国の領土の一部であり、かつてそこへ亡命

して「不法占拠」した蔣介石が、その際に大量の文物（おそらく北京に残ったものよりも優れた品々）を持ち去ったこと、さらにそれが堂々と故宮博物館を名乗って展示されていること自体、ケシカラン話なのではないだろうか。そんな党と政府の下で生活し教育されてきた人々にとっては、これらの展示はいわば「盗品」を誇示するような話であり、「これ返せ」という厄介な話にはならないのか。僕はそんなことを考えて、いくらか気を揉んでいた。蓋し余計なお節介の最たるものか。ところが、数え切れない観光客の群れは、みんなニコニコと楽しそうに、館内を廻っていく。見ている内に、僕は何となく拍子抜けしていった。まあ、彼ら彼女らは殆どがツアーでの訪台のようであるから、あまり問題を起こしそうな人々は、最初から加わっていないのかもしれない。大多数の人々にとっては、そんなことより、中華民族同士の繋がりが大切ということなのか。あるいは、逞しい現実対応能力のゆえか。それにしても、僕のようになまじいに「歴史」の知識を背負い込んで、しかも脇から覗いていると、ついあれこれ余計なことを考えてしまいがちであるが、……実際にその「歴史」の中で生きている人々は、そんなことにいちいち構っていられないのかもしれないね。

さて、展示の中味である。よく日本でも写真などで紹介される「翠玉白菜」は、確かに精巧で美しい。ただ、僕には工芸の美が分からないことが勿論原因なのだけれど、思ったよりも小振りなその品物には、さほどのインパクトを感じなかったことも事実である。念のために付言すれば、他の先生方は感心して見入っていたものであるが。野暮と無粋が服を着て歩いているような僕が、文句なく惹きつけられたのは、古代殷周の青銅器と銘文のコーナーである。毛公鼎には感動しましたね。仄暗い展示室の中で、鼎の内側の銘文が読めることはないけれど、かねて漢字の歴史を調べる上での重要資料と伝聞していた現物を目の当たりにした昂奮は、なかなかの味わいであった。「昔聞洞庭水、今上岳陽楼」なんて思わず口ずさんだものである。ともあれ、この故宮博物館、確かに中華王朝数千年の歩みを描き、圧倒的なスケールを誇っていることは確かである。短い時間ではあったけれど、一行はすっかり堪能していた。

昨日の淡水の城跡でも薄々感じていて、さらにこの博物館ではっきり意識したことがある。展示説明などが分かりやすい。中国語といったら「我愛爾」しか知らない僕でも結構意味がとれる。ひとつには、英語の説明が併記される場合が多く、相互に参照すれば何とか話の筋道を辿っていけることも大きいのであるが、それ以上に感じるのは、漢

字で書かれた漢文（当たり前であるが）は確かに分かりやすい、ということである。とりわけ日本人にとっては。このように言う時、僕が大陸の簡体字、韓国のハングルなどを念頭に置いていることは明らかであろう。あの表記には確かにそれなりの合理性は有るのかも知れない。僕にはよく分からないけれど。しかし、日常でそれらに接したり、学ぶ機会を持ったりということが乏しい普通の日本人にとっては、それだけを見せられても「何じゃこりゃ」というしかないことも事実であろう。解読の手掛かりが無いのである。それに比べると、日本人の使用するものと共通性の強い漢字をふんだんに用いている台湾の説明文は、われわれにとって、近隣諸国の中で一番分かりやすい表記であるということになるのではなかろうか。



圓山大飯店

　そのあと、昼食にまわる。訪れたのは圓山大飯店というおそらく台湾でも最高級のレストラン、食事はビュッフェ形式で勿論大変な美味である。全員が、年齢も胃袋のキャパシティも忘れて何度もお代わりに立っていった。ただ、そうしたすばらしい店であっただけに、そこで洗面所に立った時には、かなりの日本人が違和感を感じるのではなかろうか。はっきり言ってしまえば、日本の飲食店のトイレを見慣れた目には、ややばっちい印象が残ってしまうのである。まあ、これは個人差もあるかもしれないけれど。ただ、概していえば、大陸にせよ台湾にせよ、洗面所の風情は日本人の感覚とは必ずしも一致を見ない場合が多いらしい。何かのガイドブックにも、用を足すならなるべくホテルかレストランなどで、と記されていた。ホテルはまったくの無問題である。ただ、これほどのレストランでこの様子なら、街中で用を足すのは確かに一苦労なのだろうと思ったのは事実であった。ところで、このレストランがかつての台湾神宮（昭和一九年以前は台湾神社）の跡地に建っていることはまず知識として分かっていたのであるが、実際にそこを訪れると、正しくその歴史が体感できる。高台

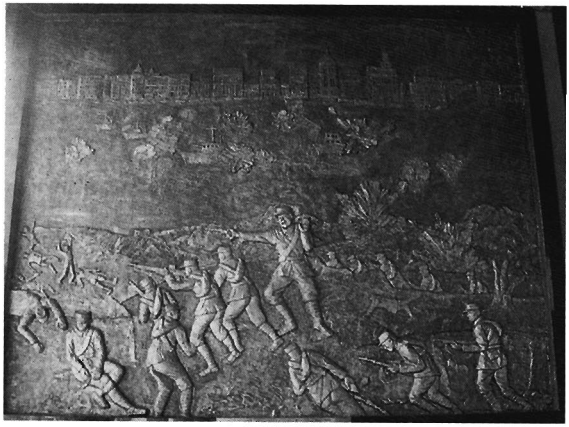
に堂々と聳えているレストランまで、神社に上っていくように、広い石段を踏みしめて行くことになるからである。かつての日本の神々は退場し、今や万国共通、千古不易の食の神がこの地に降臨され給うている。そして僕も、美味なるものをもたらす食の神には、理屈も国境も越えて敬虔に頭を垂れたのである。

午後には忠烈祠に向かった。中華民国のために戦場で犠牲となった人々を祀る国家施設であり……こういう喩えはものすごく反発を受けるかもしれないけれど、要するに台湾版の靖国神社かというのが僕の感想であった。中華民国のために散っていった志士や兵士たち、実に三三万人にのぼるという人々を慰霊する空間である。亡魂はもはや何を語ることもなく、静かに眠っているが、一方彼らの活動期が、遡れば民国成立の革命時代から抗日戦争、国共内戦に至る、長く且つ敵対勢力が入り乱れた動乱の年月にわたっていることは、台湾の……というより中華民国の、そしてその地を長期にわたって統治しつづけている国民党の辿った近現代史が、どれほどの紆余曲折を孕む入り組んだものであったのかを、雄弁に物語る。

忠烈祠での衛兵交替のセレモニー

その一方で、この施設はひとつの観光名所でもある。門前には何台ものバスが止まって観光客たちを吐き出し、僕たちの周辺にも明らかに日本語でわいわい言っている人々が群れていた。そのお目当ては、門の脇に微動だにせず佇んでいる衛兵である。そして、その交替のセレモニー。曲芸的要素まで入った、明らかにひとつのショーである。皆さん、そのパフォーマンスにすっかり堪能しているようであった。ただ、衛兵交替のショーが門から奥の巨大な祠堂までの間で繰り広げられている時、それを取り囲んで移動していた人々の目に、祠堂の入り口に据えられた扉脇のレリーフは写っていたのか、少し気に掛かった。レリーフはふたつ。どちらも中華民国すなわち国民党政権軍の勇戦を描いたものである。ひとつは中共軍との戦闘で、これはま

あ、われわれは他人事と思って眺めていればよい。もうひとつ、日中戦争の際、南京攻略に向かう日本軍と対峙した民国軍の戦闘図が掲げられている。繰り返すが、この二枚のレリーフには、中華民国と国民党政権が歩んだ近代史の複雑さが塗り込められている。歓声をあげて進む日本人たちは、それを一向気にしていない、というより、そんな絵には見向きもせず、たとえ振り向いたとしても、それが何を意味するのか分からない、ということになってしまうのであろう。その能天気ぶりはむしろ天晴れといっていいのかもしれない。



上海で日本軍と戦う民国軍のレリーフ

午後である。祠堂の周囲に列なる木々の梢の高みには、鳥たちの囀りが長閑に散りばめられている。降りそそぐ亜熱帯の日差しはあくまでも明るい。その下で展開する一齣のブラックジョークに、僕は軽い目眩を感じて暫く立ちつくしていたような気がする。

三日目。午後には帰国の予定である。午前中に、総統府と和平公園をまわる。まず総統府の見学。かつては大日本帝国の台湾総督府として植民地支配の中枢となっていた建物を継承し、戦後の中華民国統治の下で、国家の中枢機関となった建造物である。勿論、改築や補強は随分なされているのであろうが。ただ、この建物の系譜関係は、なかなか象徴的であるということが、中に入って少し見学をつづけるうちに自然に感得できる。見学コースの展示は、台湾総督から中華民国総統へとつづく統治者の歴史として構成されているのである。これだけを見ていると、総統とは大日本帝国の台湾総督の後裔であるかのようにすら感じられてくる。ものすごく乱暴な割り切り方であることは承知の上で敢えて言うのであるが、ここではかつての日本統治は必ずしも否定されていないという印象をうける。総督なら児玉源太郎、民政長官なら後藤新平、彼らを筆頭とする歴代の日本の植民地統治者たちは、われわれの感覚で見れば不自然なくらいに好意的に紹介され、その治績が顕彰されている。総統府のガイドの方が一行を導いて下さったので

あるが、まだ元気な初老とも見えたその方はもう八十翁であるという。そのおじいさんも、台湾総督を務めた誰彼について、「こんなにいいことをした」という口調で、勿論日本語を上手に操りながら、説明してくれる。日本人であるこちらがロクに知らないような日本の人物について、外国の方が一生懸命に持ち上げてくれているのである。

繰り返すが、それが行なわれている場所は、現在の中華民国政府の中枢部である。われわれが日本からやって来た一行であるという条件を割り引いても、この展示やガイドの説明内容は、現在の台湾社会が過去に対して抱いている感覚の、少なくとも一面を示すものと捉えてよいのであろう。そういえば、と初日の国立台湾博物館でも同じような感慨に襲われたことを思い出す。そちらも戦前は児玉総督及後藤民政長官紀念博物館であった建物が、史跡として保存され、現在も国立博物館として維持されている。その中には、児玉源太郎と後藤新平の銅像が安置される一角があり、両者の堂々たる威風を伝えていた。

中華民国総統府

台湾総督府……ではなくて中華民国総統府の見学を終えて、一行はその目と鼻の先にある和平公園へと向かう。公園内の二二八記念館が目的地である。あまり日本では知られていないかもしれないが、台湾現代史の暗部といっていい二二八事件の関係資料などを展示している建物である。第二次大戦に敗れ、日本支配が崩壊した台湾は、中華民国もしくは国民党統治の下に入った。しかし、かなり強権的で規律も乱れていたといわれる国民党の出先機関や関係者への台湾人士の反発が高まった結果、一九四七年二月、台北などで国民党軍による大弾圧が行われた事件である。数万にも及んだとされる虐殺の犠牲者の数は、現在でも正確には分からないままであるという。事件に関わる展示品や写真は、平和な日本での生活に慣れた者の目には、かなり衝撃を与えるものであるかもしれない。これも妄言であり極言であることは自覚しているが、蔣介石率いる国民党

が、戦後の統治者の交替にあたってこの大虐殺を引き起こしてくれたおかげで、日本統治に対する台湾の人々の評価は、「まだマシであった」という具合に上向いたようにさえ思える。館内でわれわれのガイド役にあたって下さったこちらも八十何歳かのおじいさん自身が、その虐殺を何とか生き延びた経験者であるという。それだけに反国民党の意識は強烈で、その反面であろう、かつて日本軍の兵士であったという経歴を誇り（台湾で徴兵が行なわれたのは敗戦間際の昭和二〇年のことであるが、話の様子では実際に戦場にも行っているようであったから、おそらくそれ以前の特別志願兵制度の段階での入営であったろう）、とにかく日本贔屓の発言を連発して下さる。その極め付けは、「とても素晴らしいものだから」と仰有って、教育勅語の写しをわれわれに配ってくれたことである。流石に一同は微苦笑を浮かべ、しかし、折角のおじいさんの（ほとんど無邪気といっていい）好意を放り出すことも出来ず、顔を見合わすばかりであった。

二二八記念館

午前中のほんの僅かな時間のうちに、われわれ一行は国民党と反国民党（民進党支持ということになるのであろうか）という、おそらく台湾の大多数の人々を含み込むであろう両極の立場のどちらからも、面映ゆいばかりの日本礼賛を浴びせかけられた訳である。僕も日本人の一人として決してそれが嫌だというのではない。ただ、われわれの側がそれに甘えて「そうだ、日本はこんなに立派で素晴らしい国だ」とそっくり返ってしまったら、それは愚かしいというしかない噴飯物のリアクションである。かつて植民地支配をした側とされた側と、そのけじめはきちんとつけることのできる感覚こそ、われわれの側にはあらまほしきものであろう。それに何より、ここは台北である。嘗ての日本統治の下でも、全島の中心的な役割を果たしていた地であり、日本の軍事・警察力によってさまざまな弾圧も食らった地方社会とは、過去への評価にも一定の落差はあり得る筈である。

そうした限定を付した上での感想であるが、この台湾の（少なくとも台北の）「親日」的雰囲気は、われわれが植民地化と近代化の相関性について考えてみようとする時の、興味深い事例となるものであるのかもしれない。これは門外漢の雑駁な感想以上のものではないと突き放して下さって結構であるが、同じ大日本帝国の植民地といっても、朝鮮は東アジア文明圏の中で、日本以上に文明化しているとの自負を抱き続けていた国であり民族であった。千数百年にわたる歴史の上からみても、そうした感覚は決して的外れとはいえない一面を有するであろう。ただ、十九世紀になると、中華帝国の「文明」と結びつき過ぎたことが災いして、西洋化という軍事強国への道に進むのが遅れ、そのために軍国日本の物理的暴力によって征服される過程を辿らざるを得なかった。彼らにとってそれは「文明」が「野蛮」に支配された屈辱なのであり、日本が植民地統治を通じて推し進めようとした近代化すなわち西洋化も、自分たちの誇るべき文化と伝統に対するおぞましき挑戦としか受け取れなかったのであろう。近代世界における弱肉強食の国際関係を持ちだして、日本の側がそうした「カビの生えている」保守退嬰の思想を嗤い、むしろ植民地化によって朝鮮の近代化を進めてあげたとの「恩恵」を強調することは容易であるし、確かに必ずしも牽強付会とばかりはいえないとも思う。ただ、そんな「理屈」をいくら持ち出しても、所詮相手を説得することはできないということもまた、一面の事実であろう。議論の前提、発想の根源が違い過ぎるからである。

それと比較した時、台湾の植民地化は、さまざまな摩擦も伴い、決して理想的な統治関係を築いたものでもないにせよ、日本に対して自己の優位を誇るための「文明」が既に現地に存在するという条件を欠いていた一点のゆえに、近代化すなわち西洋化を効率的に進める結果となったというプラス面が、より強く認識されたのではなかろうか。以前から、そんなことを漠然と、まったくの空想として思うこともあった僕にとって、今回の台湾での体験は、改めて近代化という問題を考え、学生たちとも話してみたいという思いを新たにしてくれる機会となった。

昼食のあと、一行は慌ただしくホテルに戻り、荷物を持って空港へと向かった。搭乗手続きを済ませ、飛行機に乗り込みヤレヤレと思っている内に、もう日本への入国となる。本当に台湾と日本は近い所にある、と日本の春浅い夕べの空気に頬を冷やしながら、僕は改めて呟いていた。

帰国して一月ほど経った頃であったろうか、ＮＨＫが日本の近代について検証するシリーズを放送し始めた。その一回目として、台湾統治の問題が取り上げられた。日本の

台湾領有が、軍事力に依存した「戦争」として展開されたことを基調とする構成であり、その結果としての植民地統治が現地の「台湾人」にもさまざまな不満を抱かせるものになっていたことを、その時代を生きた人々の証言によって浮き彫りにしようとする試みであった。その捉え方に賛成するか、反対するかという感情とは別に、番組としての出来映えという次元で見れば、取材や編制は丁寧に行なわれているし、しっかりした作りであったと僕は思っているが、この放送に対して一部の政治家たちが「偏向だ」といった類の非難を浴びせたことは記憶に新しい。僕はそうしたイデオロギッシュな攻撃に与する気は全く無いし、むしろそんなことを十年一日のように吠えたてる向きには軽侮の念を抱くこともある者なのだが、たまたま自分も台湾の空気を少しだけ吸ったばかりであったから、その体験から番組に対して多少の感想めいた思いを紡いだところはあった。この番組に登場した人々は、その経歴などから察するに、おそらく「台湾人」の社会の中では比較的上層の立場に属するような方たちであったのではないか。そうであれば、彼らは植民地支配の下では日本人が上に立っている構図から抜け出すことができず、独立国であれば恐らく彼らが占めたであろう指導的地位を、ずっと剥奪されつづけたことになる。

一方、われわれが二二八記念館でお会いしたおじいさんのように日本軍の兵士として志願したであろう「台湾人」の中には、軍隊という「娑婆」での社会的関係から切り離された機構の中での「平等化」を感じ取り、郷愁を抱くことになる者も存在したのかもしれない。それぞれの目に映る日本の台湾統治は、かなり異なった記憶のシルエットを形づくることになるであろう。どちらが正しいという話ではない。ただ、われわれが歴史の「証言」に接する時、留意しなければならない視点がそこに蔵されていることは確かであると思われる。

唐突であるが、僕が多少のお手伝い（というより、邪魔ばかりしていると言った方が正確かもしれないけれど）をさせていただいている愛知県史の編纂事業の中の一冊として、ちょうど台湾から帰国した少しあと、資料編の中世分、その第三巻が刊行された。別に宣伝するわけではないが、かなり出来のいい一冊である。その史料採録範囲が、十五世紀の応仁・文明の乱の終わり頃から、十六世紀半ば過ぎ、桶狭間の戦いの直前までとなっていて、最後の方に頻繁に名前が現れるのが、その頃に三河の支配者となっていた今川義元である。この人物は桶狭間で討ち死にしてしまい、織田信長の擡頭の足掛かりみたいな役割を振られてしまったために、一般にはあまりいい印象を抱かれることも

なく、興味関心の対象にもなりにくいように感じられるが、実際には十数年にわたる三河への侵攻と支配により、一五四〇年代から五〇年代にかけての、県史上での中心人物として位置づいていたといっても過言ではない。ところで、僕はいま「侵攻」という言葉を使ったのであるが、駿河・遠江の戦国大名であった彼が、その軍事力によって外部から三河に入り込み、制圧していった過程は、そう表現することが不自然ではないものである。これまでの義元による三河支配はそうした感覚で捉えられてきたと思うし、それは勿論妥当な見方なのである。

ただ、僕が敢えてこんな話題を持ち出したのは、今回の編纂事業によって史料整理が進められる中で、さまざまな興味深い史料に照明が当てられてきたと思うからで、その中にはたとえば、義元の三河侵攻にあたって三河の武士たちがどのように対応していたのかを読み取ることができる史料などがある。そうした研究は今後一層進められることと思うし、その詳細な内容に立ち入る心算はない。あくまでここでの話題に関連する限りでの言及であるから、かなり大雑把な言い方になるが、三河の武士たちは外部からの「侵略者」に団結して立ち向かおうなんて姿勢は、あまり見せてくれない。そうした者もいたかもしれないけれど、史料の向こう側で躍っている連中は、大抵のところ、この新たな外来勢力の登場を如何に自分の利益に結びつけるか（換言すれば、如何に自分の周りの三河武士たちを排除し、場合によっては叩きつぶし、自分が甘い汁を吸うために、外来勢力と結びついてその力を活用したり、対抗したりするか）に血道をあげている者なのである。戦国時代までの武士というのはそれが常態なのであり、平和な江戸時代のサラリーマン武士とはそもそも生態が違う。そうであれば、彼らが活動する世界における外来勢力は、必ずしも一方的な「侵略者」としての相貌ばかりを帯びていたとは言えないであろう。現地勢力と外来勢力との陰影に富んだ関わりから歴史を繙いていく、そんな作業が愛知県の中世史にはこれまで以上に求められてくるのかもしれない。

勿論、戦国の三河と、近代の台湾を同列に置いて論じることはできない。それはよく分かっている。分かっているから、微かに呟くだけにするのだが、大日本帝国による植民地への「侵略」は、決して正当化できないものであることを前提とした上で、現地の人々（の少なくとも一部）がそれを排斥するばかりではない、むしろ「歓迎」するような一面をも、時に蔵することがあったことは事実であり、今回のほんの僅かな旅行（だからそこでの見聞だけで、こんな無責任でお気楽な言辞を弄するのは論外であると言われれば、正にその通りと頭を下げるしかないのだけれど）

でわれわれ一行が接した風景は、そうした側面から理解することができるのではないか、というのが僕の拙い感想なのである。

ともあれ、今回の旅行は短期間の、慌ただしいものであったにも関わらず、多くの知見と感慨をわれわれ一同にもたらしてくれたと思う。僕のアホらしい感想は別としても、他の方たちは得るところが大きい数日間であったのではないか。その意味では、台湾を目的地とすることが、慰安旅行としてよりは、史学専修の教員がその見識を深めるための研修旅行としての意義を濃厚に帯びることになるであろうとの予測は、かなり正しかったと思うし、その成果は今後の各教員の教育研究の中で活かされていくことになるであろう。それは、これまで史学専修を牽引してきて下さった目黒先生のご定年を記念するに相応しい行事であった。改めて、こうした機会を与えて下さった目黒先生に感謝して、拙い報告記の結びとしたい。